

校内研修計画

1 研究主題

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくり
— 子どもの思いや考えをつないで —

2 研究主題設定の理由

(1) 新学習指導要領より

本年度から全面実施となった新学習指導要領においては、これからの学校教育に求められることとして、以下のように示されている。

…学校教育には、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構築するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。

また、今回の改訂の基本方針は、以下の5点である。本校では、特に②と③に重点を置いて研究を進めることとした。

- ① 今回の改訂の基本的な考え方
- ② 育成を目指す資質・能力の明確化 『三つの柱』
- ③ 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進
- ④ 各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進
- ⑤ 教育内容の主な改善事項

(2) 児童の実態から

本校は、豊かな田園地帯にある。児童は素朴で明るく、学習にも素直に取り組むことができる。これまでの取組である「どの子にも『分かる』『できる』授業の工夫」により、基礎・基本の定着が図られてきた。自分の考えを分かりやすく伝えることのできる児童も増え、ペアやグループなどで意見を交流し合う授業も多くなされてきた。しかし、一方通行の発表も多く、交流することで考えが深まったり、広がったりするような「対話」の能力は不十分である。また、社会的集団にふさわしい行動ができなかったり、人とうまくかかわることが難しかったりするなど、実に多様な教育的ニーズのある子どもたちも多くいる。これまでの「共感的人間関係を育む仲間づくり」の取組により、学校や学級に一人一人の違いを認め、支え合う気風ができ、そのような子どもたちも少しずつ落ち着いて生活できるようになってきている。

(3) 本校のこれまでの実践から

平成24年に、中央教育審議会初等教育分科会より「共生社会の形成に向けてインクルーシブ教育システムの構築」を目指す方向性が示され、全国的にインクルーシブ教育への取組が進められてきた。本校でも、多様な教育的ニーズのある子どもが多く在籍することから、平成28年度から特別支援教育の知見を活かし、すべての児童が「分かる」「できる」を目指して、以下のような取組を進めてきた。

年度	研究主題	研究の視点
H28 H29	一人一人がいきいきと輝く教育をめざして～言語活動の充実を通したユニバーサルデザインの授業づくり～	・一人一人が主体的に取り組む授業づくり ・一人一人が安心して過ごせる集団づくり ・一人一人の教育的ニーズに応じた支援

H30	一人一人がいきいきと輝く教育をめざして ～言語活動の充実を通した ユニバーサルデザイン の授業づくり～	・一人一人が主体的に取り組む 授業づくり ・共感的人間関係を育む学級集 団づくり
R1	学びの質を高める授業づくり・仲間づくり ～「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け て～	・学びの質を高める授業づくり ・共感的人間関係を育む仲間づ くり

このような取組から、学校生活アンケートの「学校に行くのが楽しい」「勉強が分かる」という問いに肯定的肯定的な回答をした児童が増えた。それは、教師が共通意識のもとで、「分かる」「できる」授業を目指して授業改善に取り組んだ結果だと考えられる。また、昨年度は、特に人権意識を育み、自尊感情を高める学級集団づくりに重点を置いて取り組んだ結果、互いを認め合う温かい人間関係が育まれてきた。

しかし、研究内容が広がり授業改善への取組が十分できなかったことが課題として挙げられた。授業づくりについては、以下のような課題が明らかになった。

- ・ 学習課題が児童にとって必要感のあるものになっていない。
- ・ 発表が教師の質問に対する一問一答であったり、その話線が児童から教師への1対1で、児童同士の話線が交わらないものであったり、「対話」による学びが十分できていない。
- ・ 児童が学ぶ喜びを実感したり、次の学習への意欲を高めたりする振り返りが十分できていない。

そこで、今年度はこれまでの取組の成果である互いを認め合う温かい人間関係や学習規律の徹底、基礎基本の定着を基盤にして、授業改善に重点を置いて取り組むことにした。

3 研究主題について

(1) 「主体的・対話的で深い学び」について

【主体的な学び】とは

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動をふり返って次につなげる学び。

【対話的な学び】とは

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えることを通じ、自己の考えを広げ深める学び。

【深い学び】とは

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び。

(2) 「子どもの思いや考えをつないで」について

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、学習課題を自分の問題として捉えるとともに、その解決に向けて、一人一人が自ら学び判断し、自分の考えをもって、他者と話し合い、よりよい解決方法を見つけることができるような力を児童に付けていくことが必要である。また、その過程において、児童が各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせることができるような工夫も考えていく必要がある。そのために、「つなぐ」をキーワードに4つの視点から授業改善を進めることにした。

【視点1】対象とつなぐ ～子どもの思いや考えを大切にした学習課題の設定～

【視点2】他者とつなぐ ～考えを伝え合い、高め合う対話の工夫～

【視点3】自分とつなぐ ～学習意欲を育て、次の学びにつながる振り返りの工夫～

【視点4】「見方・考え方」を働かせるための指導の工夫

4 研究内容

【視点1】対象とつなぐ ～子どもの思いや考えを大切にした学習課題の設定～

児童に問題意識をもたせたり、学ぶ必要感を感じさせたりするためには、児童の意識を大切にしなければいけない。教材に対する驚きや疑問、矛盾など、児童の知的好奇心を揺さぶり、児童の思いを表出させ、それをまとめていきながら学習課題を設定することが学習意欲につながると考える。それは、1時間の授業だけでなく、単元を見通した学習課題を設定することも考えられる。

(1) 対象（教材）との出合わせ方の工夫

子どもたちが学習対象と出会ったとき、「身に付けたことが使えそうだな」という見通しをもったり、「身に付けたことと全然違う」という新鮮さを感じたり、「どうして～だろうか」という疑問をもったりしたときに、子どもたちは解決への意欲をふくらませるのではないだろうか。このような子どもの心が動く学習対象との出合わせ方を工夫し、学習への意欲を高めたいと考えている。

教材そのものを工夫	教材の提示の仕方を工夫
<ul style="list-style-type: none">・子どもの興味、関心を喚起するICTや写真を使った教材・子どもが直接触れられたり、体験できたりする教材・これまでの学びとのつながりや違いに気付く体験を教材化・解決困難な状況を設定した教材・これまでの学びとの違いが明確な教材・矛盾を含む教材	<ul style="list-style-type: none">・一部を隠して提示する。・並べて提示する。・分けて提示する。

(2) 本時のゴール（ねらい）につながる学習課題の設定

本時（または単元）の目標は何か、子どもにどのような力を身につけさせたいかを明確にしたうえで、学習課題を設定する。

まず、本時学ばせたいことを子どもの言葉で表してみる。次に、その言葉が答えになるような学習課題を子どもの言葉で表してみる。子どもの言葉で考えることで、ねらいが明確になるとともに、子どもの意識にそった授業を展開できると考える。

【視点2】他者とつなぐ ～考えを伝え合い、高め合う対話の工夫～

(1) 聴き手を育てるための工夫

対話を深め、深い学びを生み出すためには、相手に意識を向けて、深く理解しようとする聴き手を育てることが大切である。ただ単に「聞く」とは異なり、「相手がどのように考えたのか」「どうしてそう考えたのか」「どこからそう考えたのか」など、反応したり、確認したり、問いかけたりしながら「聴く」ことができる子どもを育てたい。具体的な子どもの姿は、以下の通りである。

反応	：うなずきながら相手の話を聴いたり、分からない言葉や疑問に感じたことを素直に言葉にしたりすること
確認	：相手の考えを自分の言葉に置き換えて確認すること 「〇〇さんが言いたかったのは、～ということですか」
問いかけ	：相手に意識を向け、思いや考えについて問いかけること 「どうしてそう考えたのですか」「どこからそう考えたのですか」

① 教師の立ち位置の工夫

対話の場面などで、教師が黒板の前にいると、発言する子どもは、本来聴き手である他の子どもたちの方を向かず話すことが多い。そこで、教師だけが聴き手にならないように、教師も聴き手の一人となるような位置で立つようにする。そうすることで、教師を含めた聴き手全員に、自分に語っているのだと意識させることができると考える。

② 声かけの工夫

聴いている子どもに、発言者に意識を向け、聴き手としての明確な意識をもたせるため、次のような声かけをする。

繰り返しを促す	：「〇〇さんの言ったことをもう一度言ってくれますか」
要約を促す	：「〇〇さんの言ったことを、自分の言葉で言い換えられますか」 「〇〇さんの言ったことを、まとめて言えますか」
分かりやすい説明を促す	：「〇〇さんが言ったことは、どういう意味ですか」
意見や感想を促す	：「〇〇さんが言ったこと聴いて、どう思いますか」

(2) 子ども全員が対話に参加できる問い

深い学びを生み出すためには、全員が対話に参加できる問いが必要である。学び合いの場面では、話し合いの目的（考えを広げる・一番いい方法を選ぶ・新たな考えを創り出す・一般化するなど）を焦点化する問いを工夫することで、学びを深めていくことができると考える。問いについては、次のような形式が考えられる。

問いの形式	例
選択する問い	「Aなのか、Bなのか」
妥当性・真偽を考える問い	「本当にそう言えるのか」 「いつでもそう言えるのか」
比較する問い	「どちらが～か」
順位を決める問い	「一番はどれか」 「より分かりやすい考えはどれか」 「より簡単な方法はどれか」
評価する問い	「～はいるか、いないか」 「～に納得したか」

【視点3】自分とつなぐ ～学習意欲を育て、次の学びにつながる振り返りの工夫～

授業が児童にとって主体的な学びの場となるためには、1時間や単元の終末部分で、自分の学びの状況を見つめさせることが必要である。学習活動を通して、「分かった」「できるようになった」という達成感や充実感、新たな学びへの意欲となる。また、友達との協働で課題を解決することができたという経験は、教室で学ぶことの喜びにつながる。自分の学びを再度自分に問うことによって、学びの意味や価値について、児童自身が気付くような振り返りを効果的に行っていくことが重要である。

(1) 振り返りの視点

振り返りの視点は、「学習内容に関すること」「解決の過程（協働）に関すること」「次の学びにつながるもの」の三点とする。ただ、発達段階という児童の実態を念頭に置いて、視点を絞るなどの工夫が必要である。振り返りの場面において教師は、児童が授業前の自分とつないで考えたり、次時の自分の課題へとつないだりすることができるような助言をする。

<振り返りの視点例>

学習内容に関すること	解決の過程（協働）に関すること	次の学びにつながるもの
<ul style="list-style-type: none"> できたこととその理由 分かったこと、気付いたこと がんばったこと、できるようになったこと 	<ul style="list-style-type: none"> がんばっている友達の姿 友達に助けてもらったこと 友達にアドバイスできたこと 友達の考えを聞いて考えたこと 	<ul style="list-style-type: none"> 疑問に思ったこと もっと知りたいこと 次に挑戦したいこととその理由 他の学習でも使えそうなこと

(2) 振り返りの方法

振り返りの方法は、45分という限られた時間の中で行うこともあり、子どもたちにとって抵抗なく、短時間でできるものが望ましい。低学年では、文章で記述することや自分のことを客観的に見ることが難しいなどの実態がある。このような発達段階を配慮し、方法を工夫する必要がある。例えば、低学年では、できたことを絵や図で表して、その理由などは話し合うといった振り返りを行うことも考えられる。また、自分自身で振り返りを行った後、それを交流するという他者と協働しながら行う振り返りも取り入れたい。個々が振り返ったことを、ペアやグループ等の小人数や全体で話し合い、共有することで、自分ができるようになったことや次に取り組みたい課題をより明確にすることができると思う。グループ活動等の協働を通してできるようになったことの振り返りを交流することで、他者と協働することのよさを感じ、協働することへの意欲につながると考える。

【視点4】「見方・考え方」を働かせるための指導の工夫

「主体的・対話的で深い学び」の実現において、児童が各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせることが重要であると、新学習指導要領では、次のように述べられている。

1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

各教科等の指導に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

- (1) 第1の3の(1)から(3)までに示すことが偏りなく実現されるよう、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと。特に、各教科等において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を發揮させたりして、学習の対象となる物事を捉え思考することにより、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方(以下「見方・考え方」という。)が鍛えられていくことに留意し、児童が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。

※小学校学習指導要領解説「総則編」P4「改訂の基本方針」から抜粋

「見方・考え方」とは、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という、その教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等の『解説』には、「見方・考え方」について解説されている。例えば、社会科では、「社会的事象を位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して捉え、比較・分類したり、総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること」と説明されている。前半には、社会科ならではの固有の見方・考え方が、後半にはいずれの教科等においても共通する見方・考え方が示されている。教科固有の「見方・考え方」とは、その教科等の学習内容や教材に着目する視点である。共通的な「見方・考え方」は教材などから収集した情報の処理の仕方や手続きなどの方法だといえる。つまり、「見方・考え方」は学習を深めていく際に必要となる「学び方」と言い換えることができる。子どもたちが「視点や方法」を駆使して学びを深めていくようになるためには、教師が学習場面で必要とされる「見方・考え方」を明確に押さえ、それらを働かせるよう適切に導く必要がある。そこで、各教科等における「見方・考え方」について、全ての教職員で共通理解を図ることが必要である。そして、児童が「見方・考え方」を働かせることができるようにするために、どんな指導の工夫ができるのかを考えていきたい。

(1) 各教科等における「見方・考え方」についての共通理解

それぞれの教科等での「見方・考え方」を洗い出し、「見方・考え方」を働かせている具体的な児童の姿を明らかにしていく。

(2) 児童に働かせたい「見方・考え方」を押さえた本時のねらいの設定

学習指導要領解説編から目標や領域、内容を押さえる。これが、児童に働かせたい「見方・考え方」の基になる。押さえた指導内容を基に、「本時のねらい」を設定する。「本時のねらい」に、児童に働かせたい「見方・考え方」が分かるように示す。児童の姿を具体的にねらいに示すことにより、児童の思考の流れを捉えながら発問を吟味したり、学習過程を組み立てたりすることにつながると思う。

<例>

1 指導内容

小学校算数編 P193(6)イ(ア)より
問題場面の数量の關係に着目し、數量の關係を簡潔に表現したり、式の意味を読み取ったりすること。

2 本時のねらい

数のまとまりや並び方に着目し、1つの式に表したり、式の意味を説明したりすることを通して、式が思考の道筋を表すことに気付くことができる。

(3) 「見方・考え方」を働かせるための教師の助言

教材固有の「見方・考え方」を働かせるためには、「教材や題材、資料や現象などをどのような視点から捉えるのか」「何に着目して学びを深めるのか」を指導する。これについては、教材などへの内容的な関わり方の助言が必要である。例えば、次のような助言が考えられる。

「○○に着目して見てみましょう。」

「どこに目をつければよいでしょうか。」

「○○の立場になって考えましょう。」

これによって、学習の対象である教材や題材を分析的、多角的に読み取り、深まりのある学びが期待できる。

共通的な「見方・考え方」を働かせるためには、収集した情報の処理の仕方や手続きなどの方法など「学習の仕方(学び方)」を助言する。例えば、次のような視点である。

- ・ 順序付ける・・・「～の順に考えてごらん。」
「順番に考えたから～が分かったんだね。」
- ・ 比較する・・・「～に目を付けて比べてごらん。」
「比べたら～がよく分かるね。」
- ・ 分類する・・・「～に目を付けて仲間分けしてごらん。」
「仲間分けすると～がよく分かるね。」
- ・ 理由付ける・・・「なぜ、そう思ったの。」
「～から・・・と考えたからよく分かったんだね。」
- ・ 仮定する・・・「もし・・・だったらと考えてごらん。」
「～をかえて考えたら・・・がよく分かるね。」具体化する
- ・ 抽象化する・・・「つまり、どういうこと。」
「どんなときにも～になることが分かったね。」

このような学習の仕方を助言することによって、子どもたちは学習活動を主体的に展開し、それまで気付かなかったことにも気付くようになると思う。また、子どもの表現の中から思考の視点や方法などを見つけ出し、それを価値付け、子どもの言葉として残していけば、その言葉を使って子どもたちは学びを深めていくことができると考える。

5 研究の概要

<教育目標>

やさしく かしこく たくましく

<研究主題>

生きる力

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり
— 子どもの思いや考えをつないで —

<視点4>

「見方・考え方」を働かせるための指導の工夫

<視点1>対象とつなぐ

～子どもの思いや考えを大切に
にした学習課題の設定～

学習活動

つかむ

考える

話し合う

振り返る

<視点2>他者とつなぐ
～考えを伝え合い、高め合う
対話の工夫～

<視点3>自己とつなぐ

～学習意欲を育て、次の学びに
つながる振り返りの工夫～

互いに認め合う温かい人間関係

学習規律の徹底・基礎基本の定着